

十年三月廿九日丙申、向池尻家、彈正少弼面會參役之儀、萬端相頼、且申談條々如左。

一進物未定之由、下薦公卿被聞合、相分次第可被知由。

一召具人數、先雜色四人、白丁二人、步行覺悟之由、大雨は無據可爲乘輿包輿、少雨は先歩行之積云。

云、粗如此雖治定、今一應交野右衛門佐相談之積云々、予乘輿之事、并召具人數等不及斟酌間、任所存可用捨旨、深切示給也。

女房輿
〔續視聽草 初集十〕乘物名目

女房ノ輿トハ、今ノ世モ女乗物ト云ガ如ク、其製造聊カタガヘルナリ、尤下簾等アルベシ、今京師ニテ用ラル、女輿ハ、必下簾アリ、京師ノ俗ニ、是ヲ車輿ナド云ヘリ、將軍家出行之至極ノ内々ナル故、女輿ヲ用テ、供奉ヲモ少略アルナリ。

〔明月記〕建仁二年二月二日、自鳥羽御幸八幡、女房輿三。

〔吾妻鏡 三十九〕寶治二年十月六日己卯、將軍家藤原賴經俄入御于鶴岡別當法印雪下坊、被用女房輿。

〔吾妻鏡 五十二〕文永三年七月四日甲午、戊剋將軍家宗尊親王入御、越後入道勝圓佐介亭、被用女房輿。

可有御歸洛之御門出云云。

〔宣胤卿記〕永正十四年閏十月二日、今日室町殿、爲有馬山温泉令下攝州給、依御中風氣也、御忍分、被用女房輿云々。

〔倭訓栞前編九〕古編九こし 釣こしあり、又半切とも稱す、もと官家のめしつかはる、婦女の乗物也、今公卿夫人とても是にめす也。

〔板坂卜齋記下〕慶長元年秀頼公三歲上洛、中略馬三疋鞍置大總、土佐駒、其次見せ釣輿一丁、次に釣輿に秀頼公乳母に抱れ供の女房衆、釣輿に三十一、御供の騎馬諸大名の子供、十より内、何も裝束。

〔梵舜日記〕寬永三年九月六日、行幸之儀式也、中略攝家清花衆、塗輿十五丁計にて通也、次女中方之。